日本統計学会会報

2026.10.31 No. 209

発行—— 一般社団法人 日本統計学会
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5F
公益財団法人 統計情報研究開発センター内 日本統計学会事務局
Tel & Fax：03-3234-7738
編集責任—青嶋 誠(理事長)／明石 郁哉(庶務理事)
朝日 弓未(広報理事)／田島 友祐(広報委員)
趙 宇(広報委員)
振替口座—00110-3-743886
銀行口座—みずほ銀行九段支店普通 1466879番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1．巻頭随筆：25＋25＝50……岩崎 学…1
2．統計学会各賞受賞者のことば
2.1 第31回日本統計学会賞
……増田弘毅…3
……樋口知之…4
2.2 第６回日本統計学会中村隆英賞
……樋口美雄…6
……椿 広計…7
2.3 第22回日本統計学会統計活動賞
……（一財）日本統計協会…8
2.4 第22回日本統計学会統計教育賞
……株式会社 Rejoui…9
……地道正行…10
2.5 第20回日本統計学会研究業績賞
……荻原哲平…11
……栗栖大輔…12
2.6 第40回小川研究奨励賞 ……後藤佑一…13
3．第２回統計検定文部科学大臣賞表彰式報告……14
4．理事会・委員会報告……15
5．2026年役員・代議員協議会記録……17
6．新刊情報……17
7．学会事務局から……17
8．投稿のお願い……18

1．25 + 25 = 50

岩崎 学（順天堂大学／統計数理研究所）

本年（2026年）４月，銀行通帳の入出金明細に「1,000円 ザイ トウケイ」なる出金記録があった．この「ザイ トウケイ」は出金先として日本統計学会を表すもので，何だこれは？と訝しんでいたところ，学会事務局から「学会正会員の期間が50年を超えたので会費を1,000円にする」との連絡があり，確かに学会の会費規程の第５条２項に「正会員の期間が通算して50年以上の会員は，会費を1,000円とする．」とあって，これが適用されたものと知った．学会の理事長・会長を務めていながら，この規程の存在は知らなかった．来週の授業の準備とか今月中の原稿執筆期限などに追われ，過去を振り返る余裕のない自分にとっては，もうそんなになるのかと感慨深いものがあった．

また，９月の統計関連学会連合大会に行ったところ，講演報告集に「連合大会25周年記念」とあった．そうか，もうそんなになるのか，とこちらもちょっぴり感慨深かった．してみると，私の学会生活は，連合大会を境に前半25年と後半25年に分けられることになる．多少の誤差を気にしなければ（統計学の常套手段），前半が20世紀，後半が21世紀と言えなくもない．

という訳で（かどうかはさて置き），この50年を簡単に振り返ってみたい．まぁ年寄りの話は自慢話か昔話と相場は決まっているが，自慢話はなるべく最小限にして，昔話中心に語ろう．

まず前半25年．正会員50年ということは，私が統計学会に入会したのは1977年のようで（記憶は定かでない），大学院修士２年のときということになる．当時は，研究発表の「本場所」は日本数

学会統計分科会で，私の学会デビューもそれであった（1976年10月の修士２年のとき）．統計分科会は並行セッションがなくすべての研究発表は参加者全員の前で行われ，T 先生とか S 先生とか怖い先生方の前で緊張しながら発表したものであった．当時の発表スタイルは，黒板に数式を書きまくるかあるいは数式などをあらかじめ書いた模造紙を黒板に貼り付けるかのいずれかで，私は後者であった．この頃は漸近理論・漸近展開全盛で，日本の漸近展開学派の活躍は目覚ましく，私もほんの少し貢献した．また竹内啓先生（T 先生！S 先生は誰でしょう）の「この問題ではあと10本以上論文を書かないと」というセリフには，論文１本書くのも四苦八苦していた自分には夢のように思えた．私の日本統計学会へのデビューは1978年で，爾後ほぼ毎年研究発表を行ってきた．また，統計学会の論文誌（和文誌および欧文誌）に最初の論文が出たのは1984年で，それ以降全部で10編の論文を掲載することができた．

前半25年では，当時はその自覚はなかったが今にして思えば，学会のお世話になった時代であった．研究発表会に講演申し込みをしてセッションで講演し，論文を投稿しては学会誌に掲載してもらった．また，1992年には有難いことに小川賞もいただいた．それらの活動をスムーズに行う裏には関係各位の多大なご努力があった訳だが，その頃は気が付かないでいた．

後半の25年は一転，学会への恩返しの時代となる．ここでは私が直接関わった５つの事柄（学会事務局移転，統計関連学会連合発足，学会法人化，統計検定開始，JJSD 創設）について，関係した方々のお名前と共に述べる（記憶に曖昧な点があるためすべての方々を挙げられない点はご容赦を）．

日本統計学会の事務局は長らく統計数理研究所にあったが，種々の事情でそれを移転する必要が生じ，現在も続く公益財団法人統計情報研究開発センター（SINFONICA）に委託することとなった（学会 HP の「学会の歴史」によると2006年４月に全面委託とあるが，それ以前から継続的に話し合いを続けていた．これに対しては，多方面に顔の広い美添泰人氏のご尽力は大きかった．事務局は学会運営の要であり，当初からお世話いただいている阿部美和子さんには大いに感謝している（いつも代議員会などの出欠を忘れる私にリマインドしていただいています）．その後 SINFONICA には，歴代の理事長・専務理事のご協力もあり，複数の学会がお世話になっている．

統計関連学会連合の発足および連合大会の開始には前史ときっかけがある．まず，応用統計学会と日本計量生物学会は長らく時期を同じく前後して学会を開催してきた実績があった．また1996年には，統計学会は日本行動計量学会と千葉県の幕張メッセで学会を同時開催した．この時私は両学会の理事を務めていて，同じく両学会で活躍されていた田栗正章千葉大教授と密に連携し，両学会の同時開催にこぎつけた．このように学会間の連携に関してはある程度の下地があったのである．

きっかけは，小西貞則氏が応用統計学会会長と日本統計学会理事長の両方に選出されたことにある．これで学会間の協力が一気に浮上してきた．個別に学会を開催するのではなく，共同して開催する道の模索が始まった．私はこのとき日本統計学会と応用統計学会の両方の理事を務めていて（一体いくつ理事を務めれば気が済むのか），当時の廣津千尋応用統計学会会長と調整し，日本統計学会，応用統計学会，日本計量生物学会の３学会で，記念すべき第１回の連合大会を，廣津会長の当時の勤務先の明星大学で開催した．また，この３学会からなる統計関連学会連合の初代理事長として廣津会長を選出した．その後，日本計算機統計学会，日本行動計量学会，日本分類学会を加え，統計関連学会連合は現在の６学会体制となっている．

学会の法人化は，学会として活動を続け，社会的な信用を得ていくためにも必要なことだったため，学会の一般社団法人化を目指した．そのために主要な役割を果たしたのが当時の美添泰人会長で，私は理事長としてそれを補佐した．法人化には機構改革や多くの文書の作成が必要であったが，美添会長のたぐい稀な手腕でそれを成し遂げ

ることができた．ちなみに，法人化で学会の会計年度が変更になり，私の理事長としての任期は，２期連続して務めたこともあって４年９カ月となり，これは空前にして絶後であるに違いない．その後，統計関連学会連合をはじめ複数の学会が法人化したが，統計学会はそれらの端緒となったのである．

統計検定は，日本統計学会公式認定として2011年11月20日に開始した（回文か）．開始当時に尽力された方々を思い出すままに挙げると，美添泰人，椿広計，竹村彰通，中西寛子，渡辺美智子，舟岡史雄の方々のご尽力の賜物である．私も多少の貢献をしていて，公式テキストの前書きには名前が掲載されている．社会的な認知度も上がりつつあるが．私を含め当初の運営メンバーの代替わりが課題で，我こそはと思われる方々の参画を期待している．

最後にJJSD（Japanese Journal of Statistics and Data Analysis）の発足を挙げておかねばならない．前述のような各学会の協力体制の一つの成果物として，欧文ジャーナルの統合の案件が浮上した．急に出た話ではなく何回か出たり消えたりを繰り返していたが，私が統計関連学会連合理事長のときに，各学会の協力を得て実現にこぎつけ，2018年から刊行に至った．雑誌の運用に関しては青嶋誠氏の多大の貢献があり，インパクトファクターも取得し，ますます発展しつつある．生みの親の一人としては大変喜ばしいことである．

大雑把に50年を振り返ったが，統計学会の現在のアクティビティの中にはもちろん私が関与していないものが数多くある．和文誌の発行，統計学会賞をはじめとする各賞の授与，春季集会の開始，日本・台湾・韓国の合同セッションの実施などなど，枚挙にいとまはない．いずれも先人あるいは当時の担当の方々のご努力に帰すること大である．

近年の生成 AI の発展で統計学は今後どうなるか，みたいなことを書くつもりがすでに予定の枚数を超過している．年寄りの繰り言・世迷い事になりそうなのでやめておこう．若い人の力で統計学会そして統計学・データサイエンスが今後もますます発展するよう祈っている．私もまだまだ頑張りますよ．

２．統計学会各賞受賞者のことば

2026年９月08日，統計関連学会連合大会において，日本統計学会各賞の表彰式がありました．日本統計学会各賞の受賞者のみなさまから，受賞のことばを頂きましたので，以下の順にご紹介致します．

・第31回日本統計学会賞：
増田弘毅 氏，樋口知之 氏
・第６回日本統計学会中村隆英賞：
樋口美雄 氏，椿　広計 氏
・第22回日本統計学会統計活動賞：
（一財）日本統計協会
・第22回日本統計学会統計教育賞：
株式会社 Rejoui，地道正行 氏
・第20回日本統計学会研究業績賞：
荻原哲平 氏，栗栖大輔 氏
・第40回日本統計学会小川研究奨励賞：
後藤佑一 氏

2.1 第31回日本統計学会賞 受賞のことば

増田　弘毅（東京大学）



このたびは日本統計学会賞を賜り，身に余る光栄です．ご推薦ならびに選考にあたりお時間を割いてくださった皆様に，心より御礼申し上げます．これを糧に，今後は研究の幅をさらに広げつつ深め，我が国の統計学の発展に少しでも貢献できるよう邁進してまいります．

これまで「レヴィ駆動型確率過程モデルの統計推測」を軸に研究を続けてきました．レヴィ過程は連続時間軸に沿って動くランダムウォークであり，確率微分方程式（SDE）や点過程，また生存時間モデルといった動的統計モデルを誘導する基本的な概念です．一方で，その確率構造はノンパラメトリックな部分を含んでおり，簡潔で汎用的な有効推定量を構成することは簡単ではありません．セミマルチンゲールに対する一般論から直接的な指針を得ることも難しく，「どのような部分族が研究に値するのか」を長年模索してきました．今回いただいた賞は，そうした試行錯誤のプロセスを含めて評価いただけたものと受け止めており，大変嬉しく思っています．

振り返れば大学院時代，確率過程論や伊藤解析の面白さと数理統計学に魅せられたことが今の専攻へと進むきっかけでした．当時，計量経済分野においてレヴィ過程が注目を集めていたことも大きな要因であったと思います．修士課程ではSDEで記述される隠れマルコフモデルの推定を扱い，博士課程では連続時間確率ボラティリティモデルにおける収益率分布の漸近展開やレヴィ駆動型SDEのエルゴード性を題材に論文を書くなど，少しずつ視野を広げることができました．

学位を取得してからの20年弱を九州大学で過ごしました．その大半を過ごした福岡県糸島市はとても風光明媚な場所で，わが家にとっては第二の故郷です．九大在籍中に得られた多くの研究者との交流がなければ，複数の視点をもって「レヴィ駆動型SDEモデルの擬似尤度推定法」を発展させることは叶いませんでした．温かくご指導・ご支援いただいた方々，そして議論を重ねた同僚や学生たちには本当にありがたく思っております．また，故Barndorff-Nielsen教授と未解決のエルゴード性について雑談を交わしたこと，Jean Jacod教授からEMS（European Meeting of Statisticians）での招待講演にお声がけいただいたこと，Ernst Eberlein教授と多次元一般化双曲型分布の解析的事実について情報交換できたことなどは，当時助教であった私にとって今も記憶に色濃く残っている大切な思い出です．確率解析の専門家であるOleksii M. Kulyk教授とは，20年ほど前のメールでのやり取りから今も共同研究が続いています．ハードコアな確率解析の専門家である彼の視点は，私にとって刺激的で大きな学びとなっています．

ここ数年でAI技術は飛躍的に進化し，圧倒的な情報処理能力を見せていますが，学術的に有意義な問いや研究テーマそのものを創出することは，まだ得意ではないようです．既存の情報・研究成果をつなぎ合わせたり置き換えたりして生産性を上げることはできても，科学研究の根幹を成す思考までAIに委ねるわけにはいきません．業界の変化が激しい今だからこそ，時にはあふれる情報を上手く遮断しつつ手を動かし，これまで培ってきた知識と経験から新たな問いや方向性を生み出していく気概を持ち続けたいと思います．焦らず，健康にも気を配りながら，自身の研究の昇華に努めていく所存です．今回の受賞がその大きな後押しとなることは間違いありません．あらためて感謝の気持ちでいっぱいです．今後ともどうぞよろしくお願いいたします．

受賞のことば

樋口　知之（中央大学理工学術院）



このたびは，栄えある日本統計学会賞を賜り，誠に光栄に存じます．長年にわたり国際的な水準で統計学の発展に尽力されてきた歴代受賞者の諸先生方の足跡を思うと，身の引き締まる思いであります．せっかくこのような執筆の機会をいただきましたので，多少気恥ずかしくはありますが，自分のこれまでの歩みを振り返りつつ，最後にこれからの統計学についての私なりの思いを述べたいと思います．

私は幼少の頃から，図鑑や百科事典を眺め，自分であれこれ考えることがとても好きでした．物語を中心とした絵本の世界に引き込まれるというよりも，森羅万象のカラクリを知ることに大きな

興奮を覚えていました．私が育ったのは九州の宮崎市です．決して裕福な家庭ではありませんでしたが，私が欲しがる本を惜しまず与えてくれた両親には大変感謝しています. 図鑑や百科事典には，表やグラフがふんだんに使われています．しかも私は，分野を問わずさまざまなことに興味を持っていました．そう振り返ると，少々大げさではありますが，私は生まれつき，今でいう「データサイエンティスト」のような性向を持っていたのかもしれません．

一方で，私はコンピュータにも非常に強い興味を持っていました. 高校時代, 高校に一台だけあったプログラム電卓に大変魅了され，数学担当の先生と二人で，校内実力テストの偏差値を計算したことをよく覚えています．若い方々は「電卓」はご存じでも，「プログラム電卓」と聞いても，なかなか実体を想像できないでしょう．当時のプログラム電卓は，人が電卓上で行う一連の操作をプログラムとして実行できる卓上型の計算機であり，現在の感覚からすればかなり大きなものでした．プログラムは，その機械専用の厚紙製カードに，各命令に対応する位置へ穴をあけ，それを順次機械に読み込ませることで入力していました．

大学院時代には，大型汎用計算機を日常的に利用して研究を進める一方, 必要に迫られて Z80（名作的 CPU）の機械語を扱うこともありました．また，アルバイトとして，ある有名企業の日本語ワープロの開発にも携わりました．ワープロは，現在の Word のような文書作成・編集機能を専用機として実現したものであり，コンピュータが研究だけでなく，人の日常的な知的活動そのものを変えていく時代の始まりでもありました．

こうした私自身の嗜好や経験を振り返ると，今回の受賞理由の一つとして挙げていただいた，データ同化の統計学的観点からの定式化と，その広範な応用分野への展開は，ある意味では自然な帰結であったようにも思います. 私は若い頃から，観測・計測，理論，計算をどのように統合すべきかという問題に強い関心を持ち続けてきました．言い換えれば, 個々の現象そのものだけではなく，科学研究という営みのフレームワークそのものに興味を持っていたのだと思います．それにもかかわらず，科学哲学や科学技術社会論ではなく，統計学や AI の分野で一貫して活動してきたのは，おそらく，大規模な計算を実際に動かすこと，そしてデータが生まれる現場に踏み込むことに，強い喜びを感じていたからでしょう. 理論だけでも，計算だけでも，データだけでもなく，それらが実際の科学研究の中で結びつくところに，私は一貫して関心を持ってきたように思います．

そして現在，生成 AI，とりわけ大規模言語モデルの登場によって，岡野原大輔氏が『ヒトと AI』（岩波新書）で表現した「理解する前に答えがある世界」が, 現実のものとなりつつあります．これは人類にとって大きな可能性をもたらす一方で，科学研究において無反省に利用するならば，これまで科学が大切にしてきた客観性や再現性，さらには説明可能性を損なう危険が極めて大きいです．AI は，まさに現代の「プロメテウスの火」と呼ぶにふさわしい存在なのかもしれません．私は，統計学の優れた点の一つは，人が対象を観察し，理解し，そして納得するための形式を明示的に与えることにあると考えています．そのことにより，人は選択した結果を責任もって受け入れることができたのです．これからの AI の性能向上は想像以上に加速するでしょうが，社会において統計学の果たす役割は，これまでの守備範囲と違った形にはなるかも知れませんが，さらに枢要になるはずです．後進の会員のみなさまの深慮と未来開拓に大いに期待しています．



授賞式の様子：左より，青嶋誠理事長，増田弘毅氏，樋口知之氏，狩野裕会長

2.2 第６回日本統計学会中村隆英賞 受賞のことば

樋口　美雄（慶応義塾大学名誉教授）



この度は日本統計学会中村隆英賞をいただき，誠にありがとうございました．推薦の労を取っていただいた先生，審査を担って下さった先生方，本賞の創設に関わってくださった関係者の皆様，そして会長，理事長，会員の皆様に心より御礼申し上げます．

私も中村隆英先生には大学院生のころから，多方面にわたりご指導をいただきました．大学は異なりましたが，先生には一般財団法人・統計研究会の「労働部会」におきまして，長年にわたりご指導いただきました．

中でも忘れられませんのは，私が博士課程の学生の頃，年に１度開催されました「労働部会の親委員会」に出席し，「女性の労働供給行動」について研究報告した時のことです．普段と違って，親委員会ということもあり，いつもはお目にかかることのできない先生方が出席なさっており，どのような方が聞いていらっしゃるのかも知らないまま報告いたしました．話の内容は，「就業構造基本調査」や「全国消費実態調査」の個票データを使った「日本におけるダグラス＝有沢法則の不変性と変化」についてでした．出席なさった先生方は，報告の途中からずっと下を向いていらっしゃいました．その中の一人の先生から詳細な質問がなされ，私は返答に窮しておりましたところ，中村先生が助け舟を出してくださり，私もやっとその場を乗り切ることができました．ところが報告会終了直後，ある先生から，「先ほど，ご質問なさったのは，中村先生の先生でもあります，あの有沢広巳先生，ご本人だ」と教えてくださりました．

そのことを聞きました途端，私は目が点になり，穴があったら入りたい思いになりました．その後，何を喋ったか，まったく覚えていません．以降，研究報告をする時には，私はだれが聞かれているのかをまずは確認することにしており，そしてそのたびに参加者からどのような質問がなされるのか，用意をしておくことにしています．

大学院終了後も，中村先生はいつも目をかけてくださいました．私はしばらく経ってアメリカに行きましたが，帰国後も中村先生は役所の人たちを集めて勉強会を開き，研究報告をする機会を与えてくださいました．そこでは，いま日本の労働経済学を進めるにあたって「公的統計の個票データの開放」がいかに求められているかを話しました．そしてさらには，個人や企業の行動，労働市場の動学分析を行うにあたってパネルデータが必要であることを述べましたが，中村先生はこのパネル調査を実施するきっかけを作ってくださいました．そして私はいまもこれらを礎にしてパネル調査の推定方法や技術革新・人的投資を分析し，労働移動や賃金の問題に取り組んでおります．

私にとりましても，中村隆英先生は生涯にわたる師であります．その先生の名前が刻まれた「日本統計学会中村隆英賞」をただ今，授けていただきました．私にとりまして，このことは身に余る光栄であります．この中村隆英賞受賞を契機に，新たな研究に取り組んで行く所存でおります．本日は，誠にありがとうございました．

受賞のことば

椿　　広計（学校法人昭和女子大学）

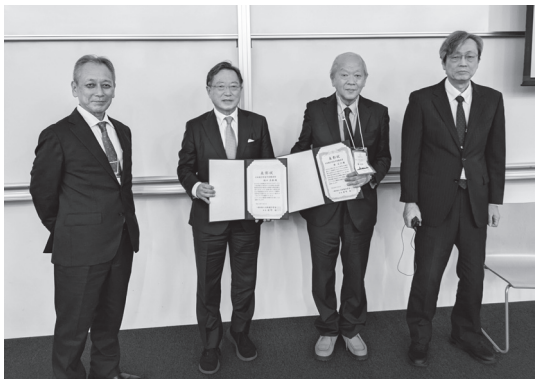


日本統計学会中村隆英賞を授与頂き光栄に存じます．推薦者・選考委員の皆様に御礼申し上げます．「品質マネジメントを専門とする統計家」との評価を頂けたことが何より嬉しく思います．慶應義塾大学理工学部在職中の1992年，奥野忠一先生が部会長を務める統計審議会調査技術開発部会に参画し，竹内啓先生，芳賀敏郎先生，吉澤正先生が公的統計の小地域統計へのスタイン推定量の応用や外れ値処理を共に論じたことが，公的統計研究に関わる契機となりました．奥野・芳賀・吉澤先生らは日本科学技術連盟多変量解析研究会で Tukey の EDA（探索的データ解析）等の産業界への普及に努められ，まさに品質マネジメントを専門とする統計家でした．私は幸いにもその活動に1980年頃から世紀末まで参画できました．竹内先生には修士時代から Fisher の統計思想をご教示いただき，公的統計の経済統計的側面については1995～1996年美添泰人先生代表の科研費「統計調査における『不完全データ』に関する研究」の勉強会でご指導いただきました．

受賞関連業績の一つは，総務省統計局・（独）統計センターの同僚と2019年に和歌山市に「統計データ利活用センター」を設立し，全国のオンサイト施設で公的統計個票の探索的分析を可能にしたことです．このアイデアは1996～1999年の科研費特定領域「統計情報活用のフロンティアの拡大」（代表：松田芳郎先生）で構想・試行され，私も統計的マッチングによるデータリンケージや擬似ミクロデータの策定・理論検討に携わりました．その後，日本学術会議マスタープラン2014「公的統計ミクロデータ等の研究活用のための全国ネットワーク整備」（提案：川崎茂先生）の採択を契機に，第Ⅱ期（2014）・第Ⅲ期（2018）公的統計の整備に関する基本計画で本格的な取組みが始まり，公的統計ミクロデータの研究利活用の途が拓けました．現在はマスタープランを拡張し，レセプト情報，がん登録情報，自殺統計個票（警察庁行政情報）等も含む公的ミクロデータ全般への同様の展開に尽力していますが途半ばです．

もう一つの貢献は，公的統計作成への品質マネジメントの実装です．2010年，私も委員を務めていた内閣府統計委員会から日本品質管理学会会長の鈴木和幸先生へ研究協力の依頼があり，「統計・データの質マネジメント研究会」が設置されました．吉澤正先生の提案で ISO20252の適用が検討され，篠恭彦氏・澤村保則氏を中心に３省・２自治体の模擬審査を実施，2014年に統計委員会へ報告し，2016年に JSQC 規格「公的統計調査のプロセス－指針と要求事項」（Std 89-01）が制定されました．2018年末の厚生労働省統計不祥事を受け，統計委員会は「公的統計の総合的品質管理（TQM）を目指した取組」を建議し，私も内閣官房統計改革推進会議で第三者監査の必要性を主張しました．2021年に統計委員会へ復帰後，「統計作成プロセス診断」とそれを担う「統計監理官」制度の議論が進み，篠氏，澤村氏，鈴木督久先生，下野僚子先生，安井清一先生らと共に2021年試行，2023年から山本渉先生らも加わり，基幹統計調査全体への本格実施に至っています．

私は統計センター理事長，総務省統計委員会委員長として，上記の事業のマネジメントに関わりましたが，これは統計センター，総務省統計局，政策統括官（統計制度担当），統計委員会委員・担当室の皆様に支えられた活動であり，ここに挙げた先人の着想を社会実装したに過ぎません．複雑化した社会の中で，証拠に基づく政策的意思決定，EBPM には，統計集計値ではなくミクロデータの分析が一層必要となり，その質保証はますます重要です．日本統計学会の中堅・若手会員の皆様に，私たちが先人の思いを引き継いだ活動をさらに発展させ，公的統計の社会的意義の増大に尽力いただければ幸甚に存じます．



授賞式の様子：左より，青嶋誠理事長，樋口美雄氏，椿広計氏，狩野裕会長

2.3 第22回日本統計学会統計活動賞 受賞のことば

川崎　　茂（一般財団法人　日本統計協会）



この度は，日本統計協会が発行する月刊誌『統計』に対し，日本統計学会統計活動賞をいただき，誠にありがとうございます．このような賞をいただいたことは大変光栄であり，協会役職員一同，心から感謝しております．受賞に当たり，推薦者の皆様，選考委員の皆様，そして狩野会長・青嶋理事長を始め，お世話いただきました学会の皆様に心より御礼申し上げます．

月刊誌『統計』は1947年に現在の名称となりましたが，前身の雑誌に遡りますと，140年余りの歴史を有しています．この長い歴史の中で，私は先人のバトンを受け，７年前から編集委員長を務めています．

本誌は，社会で活躍されている皆様に，幅広い統計の知識や情報をお届けすることを目的としており，公的統計の話題を始め，統計分析手法，統計教育，データサイエンスなど，幅広いテーマを扱っています．

こうした取組ができるのは，学会の会員の皆様から多大なご協力・ご支援をいただいているおかげです．例えば，本誌の前々任の編集委員長は舟岡史雄先生（信州大学名誉教授）でした．また，編集委員には，今回，日本統計学会中村隆英賞を受賞された椿広計先生がおられます．執筆者にも錚々たる方々がいらっしゃいます．９月号では勝浦正樹先生，西郷浩先生，10月号では渡辺美智子先生，竹内光悦先生にご執筆いただいています．11月号は「統計学のパラドックス」というテーマの特集を予定しており，岩崎学先生，狩野裕先生ほかの皆様にご執筆いただく予定です．

お世話になっている皆様すべてのお名前をご紹介することはできませんが，このように多くの皆様から優れたお知恵と多大なご支援をいただいているおかげで，本誌は大変充実した内容となっており，大変感謝しています．この場をお借りして，皆様に改めて御礼申し上げます．

統計活動賞の受賞は，先人の実績を高くご評価いただいたものと受け止めておりますが，同時に，この雑誌に対する今後に向けたご期待も込められているものと理解しております．

この機会に一つだけ，私の今後に向けた夢を紹介させていただきたいと思います．本誌が模範としているのは，オクスフォード大学出版局の「Significance」という有名な統計の雑誌です．（https://significancemagazine.com/）同誌は，一般の人向けに様々な分野の統計の分析結果や統計学の手法・理論などを分かりやすく，おもしろく紹介しており，私はこの雑誌の長年の大ファンです．

私の夢は，月刊誌『統計』をそのようなおもしろい雑誌にしていくことです．ただ，先方は，イギリス王立統計学会とアメリカ統計学会が協力に当たっており，私どもの雑誌がそのレベルに達するには大変高い壁があります．

当協会としては，この受賞を励みとして，夢は大きく持ちながら，これからも編集委員の皆様，そして学会の皆様のお力をお借りして，統計のおもしろさ，奥深さ，そして社会における大切さを多くの人たちにお伝えする雑誌として改善を重ねていきたいと思います．

月刊誌『統計』及び日本統計協会は，統計及び統計学の普及・発達に貢献することを目的としており，このことは日本統計学会の目指されること

と極めて親和性の高いものと思います．学会の皆様におかれては，これからも本誌及び当協会に対し暖かいご支援を賜りますよう切にお願い申し上げます．

末筆ながら，日本統計学会及び会員の皆様のますますのご発展とご健勝を心よりお祈り申し上げます．

（参考）月刊誌『統計』ホームページ：https://www.jstat.or.jp/toukei_y24/



授賞式の様子：左より，青嶋誠理事長，
川崎茂氏（一般財団法人　日本統計協会），狩野裕会長

2.4　第22回日本統計学会統計教育賞 受賞のことば

株式会社 Rejoui



このたびは，株式会社 Rejoui に日本統計学会統計教育賞を賜り，誠にありがとうございます．本賞の選考に関わってくださった皆さまに，心より御礼申し上げます．2021年には WiDS（Women in Data Science）の活動で私個人が賞をいただきましたが，今回は Rejoui として，企業・組織としての受賞です．教育事業をともに作り，支えてきたメンバーとともにこの賞をいただけたことを，たいへん嬉しく，光栄に存じます．

Rejoui では，学校教育から社会人の学び，専門性を持って実務を担う高度人材の育成まで幅広く統計・データサイエンスの教育に取り組んでいます．人材育成に特化した会社と受け止められることもあるかもしれませんが，当社はデータサイエンス・AI のソリューション提供企業で，日々多くのデータサイエンスのプロジェクトを進めています．そんな当社の教材開発における基本の設計ポリシーは，「産業界で実務家が実際に行う題材であること」「プロセスにストーリーを持たせること」「思考を伴い『価値創造』と『変革』に至るものであること」の３つです．学習者の経験や専門性が異なっても，学んだことを自らの課題に結びつけ，意思決定や行動につなげるという方向性は共通しています．

価値創造スキルの育成では，学習者にとって徹底して「身近」な課題であることを重視しています．自らが関わる仕事や組織，社会に存在する課題を題材に，何を明らかにし，何を変えたいのかを考える．実務家が実際に向き合う課題には，あらかじめ分析方法や正解が用意されているわけではありません．だからこそ，課題を捉えるところから，分析結果を解釈し，次の行動につなげるところまでを求める内容としています．

データサイエンス力の育成では，理論を徹底して学ぶことを大切にしています．基本統計量，回帰，相関などは，計算する過程も含めて理解できるように工夫しています．AI 時代に入り計算することそのものは楽になっても，回帰式のあてはまりとは何を示すのか，なぜ絶対値ではなく二乗するのか，といった数学的な理解は，むしろこれからもっと高いものが求められると私は考えています．対象者に応じて説明の深さは変わっても，「絶対に外してはならない理論」はエッセンスをしっかりと入れています．

データエンジニアリング力の育成では，実践（手習い）しつつ「考える」ことを重視しています．「書くこと」「書いたことを共有すること」「レビューを受けて更に見直すこと」，そして「出力結果を読み解くこと」．見るだけ，言うだけではスキルとして身につきません．実装し，動作を確かめ，その先の改善までを見据えての実行がともなうことが肝要です．

さて，これから育てる必要があるのは「問いを

立てる人」です．問いとは，思いつきのテーマではなく，現状と目的のあいだにある構造を捉え，情報ギャップを定式化することです．誰が，何を，いつ，どんな基準で判断するのかが見えてはじめて，データは意思決定のために使えるものになります．分析結果を出すことがゴールではなく，その結果を意味に変え，意思決定者に届け，次の行動につなげるところまでがデータサイエンスです．問い，分析し，解釈し，提言し，また問い直す．価値創造できる人材は，このサイクルを自分で回せる人に外なりません．

ともに教育事業を作り，支えてきたメンバー，実務課題に向き合う機会をくださった企業･行政･学校の皆さま，学びの場で問いを投げかけ続けてくださる皆さまに感謝いたします．この評価と感謝を励みに，「問いを立てる人」を生み出す仕組みを追求し，統計・データサイエンスを価値創造につなげ，社会に還元してまいりたいと思います．

受賞のことば

地道　正行（関西学院大学）



この度は，日本統計学会統計教育賞を授与いただき，光栄至極に存じます．受賞に際して，推薦者と審査委員の方々に，こころから感謝の意を表したいと思います．有り難うございました．

今回の受賞にあたって，あらためて考えて見ると「教育」とは教師だけでは成り立たず，必ず教育を受ける対象となる「学生」が存在するということに気付かされました．また，私にも「学生」時代にご指導いただいた「先生」方がいたことにも思い至りました．今回の受賞は，その連綿と続く「教育」のプロセスにおける「ある瞬間」に対して，代表として拝受させていただくことと理解しています．

受賞式典において，プレゼンターである日本統計学会会長 狩野 裕先生には，大阪大学大学院基礎工学研究科の修士課程でセミナーを担当して頂きました．先生からは，論理的なものの考え方が身につくよう，丁寧にご指導いただきました．

その後，狩野先生が在外研究のため渡米なさったタイミングで，稲垣宣生先生にご指導いただくことになり，博士課程を過ごしました．稲垣先生からは，数理統計学に加えて，インターネットやコンピュータ，データベースなどの情報環境とデータ解析を融合することの重要性をご教授いただきました．

1995年に関西学院大学商学部に赴任し，両先生の教えを実践するための教育・研究を模索しました．いわゆる「私立大学文系学部」において，統計学の基礎教育に数学的な要素をどのレベルまで盛り込めばよいのかということや，商学部においてインターネットを情報環境として利用したデータ解析をどのように教育すればよいのかということに腐心したことを思い出します．

その過程で，1999年から R を教育環境に導入しました．当時としては，統計関連のフリーソフトウェアの教育利用はあまり一般的で無かったように思われますが，それまで S 言語を研究・教育に利用していたことから，R が同等のポテンシャルをもっていたことは明らかでした．そのような流れで，R の開発者の一人であるロス・イハカ先生が在籍するオークランド大学統計学科に2003年～2004年の１年間，在外研究で滞在できたことは大きな経験でした．ロス先生が，数理統計学とデータ可視化を親和的に融合した教育・研究を実践していることを目の当たりにして，その後の研究・教育上の指針としました．

帰国後は，大学・学部の同僚の協力と理解を得て，2008年から2010年にかけて，財務データ抽出システムを構築しました．その後，このシステムから抽出したデータを可視化・解析することによって，まずは研究に，続いて教育へ利用するようになりました．私の講義やゼミを受講した学生の中には，私が伝えようとしたこと以上の知見に至り，その結果の幾つかは学部生でありながら統計関連学会連合大会や日本統計学会で発表する水

準に到達しました．また，2019年度からは，注目度の高い国内のデータ解析コンペティションに学生たちが出場する中で，次第に高評価を頂けるようになったことが，結果として，今回の受賞につながったのではないかと受け止めています．この意味で，これまで暗中模索で取り組んできた教育に対するあり方を，日本統計学会によってお認めいただけたのだと思うと，今回受賞したことには，大いに励まされます．さらに，学生の皆さんと，かれらの成果を評価していただいた全ての方々へは感謝してもしきれません．

最後に，これまで，自分の研究･教育について，迷うことも多かった中で，長年にわたって多大なる励ましとサポートをいただいた，大学院時代からの友人でもある統計数理研究所の川崎能典氏と，大学院時代の同級生である神戸大学の阪本雄二氏に感謝申し上げて，受賞の言葉に代えさせていただきたいと思います．



授賞式の様子：左より，青嶋誠理事長，
菅由紀子氏（株式会社 Rejoui），地道正行氏，狩野裕会長

2.5 第20回日本統計学会研究業績賞 受賞のことば

荻原　哲平（東京大学）



このたびは，研究業績賞という栄誉ある賞を賜り，大変光栄に存じます．ご推薦くださった先生，ならびに選考に携わってくださった皆様に，心より御礼申し上げます．また，指導教員であった東京大学の吉田朋広先生には，学生時代から今日に至るまで長きにわたりご指導いただきました．そのほかにも多くの先生方からご指導とご支援を賜りましたことに，改めて深く感謝申し上げます．私は大学院修士課程修了後民間企業に就職しましたが，吉田先生のご支援もあって学術研究を続けることができました．当時はアカデミックポストに就くとしてもまだ先のことと考えていましたが，博士号もない状態で大阪大学の内田雅之先生の CREST プロジェクトに特任助教として採用していただいたことが，研究者としてのキャリアの大きな転機となりました．

これまで私は，拡散過程やジャンプ拡散過程などの連続時間確率過程に対し，離散時間観測に基づく統計的推測とその漸近理論を中心に研究してきました．特に，擬似尤度解析に基づく最尤型・ベイズ型推定量の漸近的性質や，統計モデルの局所漸近正規性（LAN），局所漸近混合正規性（LAMN）に基づく推定量の最適性について研究してきました．確率過程モデルでは尤度関数の解析が一般に困難であり，LAN や LAMN の研究にはマリアバン解析をはじめとする確率解析が重要になります．学部時代に学んだマリアバン解析が，統計的推測における最適性を議論するための重要な道具となることに魅力を感じ，研究を続けてきました．

修士論文ではジャンプ拡散過程を扱いましたが，その後はしばらく拡散過程モデルを中心に研究していました．そのような中，統計数理研究所で上原悠槙氏と共同研究する機会があり，上原氏がレヴィ過程をはじめとするジャンプを含む確率過程を専門としていたため，再びジャンプ拡散過程に取り組むきっかけとなり，そのLANを研究することとなりました．また，大阪大学の深澤正彰先生との退化拡散過程モデルの LAMN に関する共同研究を通じて，Le Cam や Hájek，Jeganathan らによる漸近統計理論を学び，確率過程モデルへの適用を進めていました．ジャンプ拡散過程の LAN を示すにはマリアバン解析を用いた従来の方法だけでは困難でしたが，こうした漸近統計理

論と確率解析の技術を組み合わせることがジャンプ拡散過程モデルのLANを示す上で重要な役割を果たしました.

今回の受賞対象には，拡散過程の非同期観測やノイズ付き観測に関する一連の研究も含まれています．これらは株式市場の高頻度データの統計解析に動機づけられたものです．民間企業に勤務していた頃，日々株式データに触れる中で高頻度データの可能性とその統計理論としての面白さを感じました．その経験を一つの出発点として，高頻度観測に対する漸近統計理論の研究に加え，ニューラルネットワークを用いて高頻度データから株式市場の構造を学習する研究にも取り組んできました.

今回の受賞を大きな励みとし，これまで研究を支えてくださった皆様への感謝を忘れず，今後も数理統計学の理論と応用の両面から，その発展に貢献できるよう研究に励んでまいりたいと存じます.

受賞のことば

栗栖　大輔（東京大学）



この度，日本統計学会研究業績賞という大変名誉ある賞を賜り，身に余る光栄に存じます．推薦してくださった先生方，これまでともに研究に取り組んできた共同研究者の方々，そして日々支えてくれている家族に，この場をお借りして心より感謝申し上げます.

今回受賞対象となった研究は，博士課程の頃から取り組んできた時系列データや空間データに対するノンパラメトリック解析に関する研究と，それらを関数データや多様体データへと発展させた研究からなります．博士課程を修了した頃から，時系列・空間データに代表される従属データの解析手法を高次元データへと拡張する研究に取り組む中で，無限次元のデータを扱う関数データ解析という分野に出会い，強く興味を持つようになりました．その後，関数データ解析の枠組みをノンパラメトリック時系列解析や因果推論へと拡張する研究を進めてきました.

さらに最近では，距離空間に値をとるデータを統一的に扱う「ランダムオブジェクト解析」と呼ばれる分野に興味を持ち，研究を広げています．ランダムオブジェクト解析は，2010年代後半から主要な研究が登場し始めた比較的新しい研究分野です．受賞対象となった研究で扱っている関数データに加え，方向データや行列データ，形状データなど，多様体上に値をとるデータの多くは，ランダムオブジェクト解析の枠組みのもとで統一的に扱うことが可能になります．また，確率分布の空間に値をとるデータを扱う分布データ解析も，ランダムオブジェクト解析における重要なトピックの一つです．特に近年，機械学習の分野でも広く利用されている最適輸送との関連から，活発に研究が進められています.

現在は，スカラー値やベクトル値データを対象として発展してきた因果推論やノンパラメトリック解析の方法を，こうしたランダムオブジェクトへと拡張する研究に取り組んでいます．共同研究者の方々との議論を重ねる中で新たな視点を得ながら，従来の統計学の枠組みでは十分に捉えることのできなかった複雑なデータに対する，新たな統計的方法の構築を目指しています.

本賞の受賞を励みに，これまで取り組んできた時空間データ解析やランダムオブジェクト解析の理論をさらに発展させるとともに，それらの応用を通じて統計学の可能性を広げる研究に取り組んでまいりたいと考えております．既存の枠組みにとらわれることなく，新たな問題や課題にも積極的に挑戦し，統計学の発展に少しでも貢献できるよう努めてまいります．今後ともご指導ご鞭撻のほど，何卒よろしくお願い申し上げます.



授賞式の様子：左より，青嶋誠理事長，荻原哲平氏，栗栖大輔氏，狩野裕会長

2.6 第40回小川研究奨励賞 受賞のことば

後藤　佑一（東北大学）



この度は，名誉ある小川研究奨励賞を賜り，大変光栄に存じます．選考委員会の皆様，ならびに日本統計学会の関係者の皆様に，心より厚く御礼申し上げます．また，これまで私を支え，導いてくださった同門の先輩方，共同研究者の皆様に深く感謝申し上げます．何より，指導教官である谷口正信先生には，時系列解析の基礎から手厚くご指導いただきました．学部４年生という早い段階から論文執筆の機会を与えてくださり，研究者としての第一歩を導いてくださったこと，改めて御礼申し上げます．

私の研究の原点は，学部４年生の時に読んだ「ゼロ交差」に関する専門書にあります．時系列データが平均を横切った回数を用いて自己相関を推定する，すなわち，連続的なデータを０と１という二値に変換し，元の情報を復元するという発想です．この時の学びは，今回の受賞対象とも関連する「コピュラスペクトル」の研究へ繋がりました．

時系列の古典的なスペクトルは自己共分散のフーリエ変換ですが，コピュラスペクトルは，確率積分変換されたデータが分位点レベルを超えたか否かで ０と１に変換し，そのラグを考慮した共分散をフーリエ変換したものです．この論文は，ドイツ，カナダ，ベルギー，日本の４カ国間の共同研究であり，時差の関係で深夜に行ったオンラインミーティングは今でも鮮明な記憶として残っております．

また，私にとってベルギーは研究生活を語る上で欠かせない特別な場所です．博士課程の折，谷口先生の力強い後押しを受け，初めての海外滞在として２ヶ月ほどベルギーへ赴く機会をいただきました．この時，コピュラスペクトルの研究の共著者であり発案者である Hallin 先生と初めてお会いし，現在に至るまで長きにわたり大変お世話になっております．初めての海外生活でしたが，ベルギーの豊かな食文化や人々の温かさに触れてすっかり大ファンになり，当時の寮で出会った友人たちとは今でも一緒に食事に行くほどの仲です．

このベルギーとの深いご縁は，新たな研究も生み出しました．データのランダム性を検定する連（Runs）検定もゼロ交差のアイデアと関連がありますが，これを球面上のデータへ拡張しました．これは２度目のベルギー滞在時に始まった研究であり，ブリュッセル自由大学の Verdebout 先生をはじめとする共同研究者の先生方との共著論文として無事に結実いたしました．

研究室での生活を通して生まれた研究もあります．時系列 ANOVA は，一つ下の後輩たちが分散分析のテキストを輪読していた際，それをパラパラと眺めながら「時系列で何か面白い展開ができないか」と探したことがきっかけです．結果として，研究室の先輩である長幡先生と谷口先生の論文を群間相関が存在する状況へ拡張でき，これを機に派生する複数の研究へと繋がる豊かなテーマを得ることができました．さらに，曲線構造を持つモデルと一元配置の尤度比過程に関する研究は，学部時代からの同期との共著論文として実を結び，大変嬉しく思っております．整数時系列の検定問題も，院生室での藤森先生との何気ない会話からスタートした研究の続編であり，研究生活の中でも特に印象的なエピソードの一つです．

振り返りますと，私の研究成果の多くは，恩師

や共同研究者，先輩，同期，後輩たちとの対話，そして国内外での貴重な出会いの中から育まれてきたものだと実感いたします．皆様の温かいお力添えがあったからこそ，このような名誉ある賞をいただくことができたと深く感謝しております．今回の受賞を大いなる励みとし，統計学および時系列解析の発展に少しでも貢献できるよう，より一層精進して参ります．末筆になりますが，日本統計学会のますますのご発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げ，受賞の挨拶とさせていただきます．



授賞式の様子：青嶋誠理事長，後藤佑一氏，狩野裕会長

3．第２回統計検定文部科学大臣賞表彰式報告

「統計検定」では，特に優秀な成績を収められた方を対象に，文部科学大臣賞を授与しております．第２回となる今回は，2025年度の合格者が対象で，検定種別は，統計検定１級，準１級，２級，専門統計調査士の４つです．受賞者は，毎年度，一般財団法人統計質保証推進協会（以下，本協会）に設置された文部科学大臣賞審査委員会が厳正に審査を行い，決定します．

第２回（2025年度）の統計検定文部科学大臣賞の受賞者は次の方々です．

統計検定１級	奕涵豊氏
統計検定準１級	森山伊織氏
統計検定２級	古田将大氏
統計検定専門統計調査士	中野遼太氏

上記受賞者の方々への授与式が「第２回統計検定文部科学大臣賞表彰式」として，2026年５月24日（日），九段会館テラス コンファレンス & バンケットの茜で執り行われました．

１．開会の辞
２．主催者挨拶（照井伸彦・統計質保証推進協会統計検定センター長）
３．来賓祝辞（片見悟史氏・文部科学省総合政策局生涯学習推進課リカレント教育・民間教育振興室室長，代読：山本紗也華氏・同室係長）
４．表彰状授与
５．受賞者挨拶
６．特別講演「統計科学の広がりと人工知能」（甘利俊一氏・東京大学名誉教授，理化学研究所栄誉研究員，帝京大学特任教授）
７．閉会の辞

照井統計検定センター長からは，受験者累計約20万人，資格取得者延べ約10万人と，統計検定が統計人材の裾野拡大や課題解決能力の基盤形成に寄与してきていることが紹介され，その統計検定においてそれぞれ優秀な成績を収めた受賞者へお祝いと，新たな出発点としてがんばってほしいと励ましの言葉が述べられました．片見室長（山本氏代読）からは，急速に情報化が進む社会におけるデータに基づく課題解決力の重要性に加え，生涯学習社会の実現に資するものとしての統計検定の有益性に触れられ，本賞の意義を確認された上で，受賞者の活躍や協会の活動への期待が述べられました．

表彰式では，お一人ずつ山本氏より文部科学大臣賞の表彰状が授与されました．表彰状の授与の後，受賞者のみなさんから一言ずついただきました．みなさん，分野や立場は異なるものの，共通していたのは，統計は単なる数理知識ではなく，

データを用いた意思決定や判断に結びつける必須の要素であることを認識し，体系的にしっかり学び直したいということで受験に至ったということです．機械学習やAIの時代，その背景を理解しておきたいということにも触れられ，受験により，そうした時代だからこその統計学の重要性を再認識したとのことです．受験のために努力したことや本受賞で得たことは，必ず今後に役立つものであり，それぞれの立場であらたな挑戦や社会への貢献をしたいというように結ばれました．

甘利俊一氏による特別講演では，「統計科学の広がりと人工知能」と題して，約１時間のお話をいただきました．最初に，受賞者の方々への祝福と励ましの言葉が丁寧に述べられた後，ご自身のこれまでの統計とのかかわりをご紹介くださいました．統計モデルや確率分布を微分幾何学でとらえ，「情報幾何学」と名付ける新たな分野を確立されていく様子，データの背後にある仕組みを推論する科学へと統計学が発展していく背景，深層神経回路網（深層学習）を利用してAIが実現されてくる経緯などが語られ，R.A.Fisher，B.Efron，C.R.Raoなどの統計学者もお話の中に登場し，まるで統計学の歴史を追体験するようでした．そして，統計的推論や大規模言語モデルなど統計学を基礎とするAIの詳しい仕組みに触れられたのち，人工知能と自然知能（脳）の違い，すなわち，意識や心が人間の進化の過程で得た産物であり，喜びや苦悩などの不合理さをもっていることが人間のよさであることが語られました．最後に，これらを基に，AI時代の私たちのあり方や若い人たちへの期待で話を締めくくられました．非常に示唆に富む貴重なご講演でした．

以上の後，記念写真を撮影して，第２回統計検定文部科学大臣賞授賞式を終えました．

統計検定の資格取得をめざすことで，データを吟味する力と統計的な見方がしっかり身につくことが，合格者のみなさんの声からも証明されています．文部科学大臣賞の対象種別のみならず，各検定種別に挑戦をして，データに基づく問題解決能力を自分のものにし，業務や研究に大いに活用していってほしいと思います．

４．理事会・委員会報告

一般社団法人　日本統計学会　理事会

日時：2026年７月 ５日（日曜日）
午後１時00分～午後２時04分

場所：筑波大学　自然系学系棟 D802
オンライン理事会として実施
Zoom（ミーティング ID: 842 8667 4868）

理事の総数　14名　　出席理事の数　11名
監事の総数　 3名　　出席監事の数　 2名

出席者：

理事：狩野裕会長，青嶋誠理事長，明石郁哉（庶務），村上大輔（庶務），白石博（会計），荒木由布子（会誌編集和文），朝日弓未（広報），矢田和善（国際），長尾大道（渉外），瀬尾隆（渉外），竹内光悦（教育）（以上11名，括弧内は役割分担）

監事：川崎能典，山下智志

第１議案　常設委員会における委員について

青嶋理事長より，資料に基づき，現時点での常設委員会における委員について説明がなされ，審議の結果，承認を得た．

第２議案　ウェブ名簿の移行について

青嶋理事長より，資料に基づき，ウェブ名簿の移行について説明がなされ，審議の結果，承認を得た．

第３議案　日本統計学会和文誌の出版社移行について

青嶋理事長より，日本統計学会和文誌の出版社移行について説明がなされ，審議の結果，承認が得られた．

第４議案　会員の入退会

青嶋理事長より，回収資料に基づき，入退会希望者が紹介され，審議の結果，承認が得られた．

一般社団法人 日本統計学会 委員会

日時：2026年７月５日（日曜日）午後２時04分～午後２時52分

場所：筑波大学　自然系学系棟 D802

オンライン理事会として実施

Zoom（ミーティング ID: 842 8667 4868）

出席：理事11名，監事２名，委員０名，計13名

理事：狩野裕会長，青嶋誠理事長，明石郁哉，村上大輔，白石博，荒木由布子，朝日弓未，矢田和善，長尾大道，瀬尾隆，竹内光悦，川崎能典（監事），山下智志（監事）

＜報告事項＞

１．JJSD 支援委員会

丸山委員長の代理で，青嶋理事長より，JJSD の編集状況について報告がなされた．

２．和文誌編集委員会

荒木委員長より，和文誌の編集状況について報告がなされた．

３．大会委員会

寺田委員長の代理で，青嶋理事長より，2026年度統計関連学会連合大会の準備状況について報告がなされた．

４．企画・行事委員会

寺田委員長の代理で，青嶋理事長より，第21回日本統計学会春季集会の準備状況について報告がなされた．

５．庶務委員会

明石委員長より，以下の報告がなされた．

後援承諾について

・2026年度統計・データサイエンス力向上のための授業に係る優秀事例表彰

主催：公益財団法人 統計情報研究開発センター

・第20回データビジネス創造コンテスト

主催：慶應義塾大学 SFC 研究所

データビジネス創造コンソーシアム

2026年度統計関連学会連合大会における企画セッションについて

代議員選挙・会長選挙の日程について

６．広報委員会

朝日委員長より，ウェブページの改訂状況と，会報208号の準備状況について報告がなされた．

７．国際関係委員会

清委員長の代理で，矢田委員より，以下の報告がなされた．

・IMS-APRM 2026 香港（6/13-16）

・KSS-CSA-JSS Joint Sessions 2026（7/2-4）

・連合大会（9/7-11）における JJSD セッション：

・春季集会（2027/3/6順天堂大）の企画

８．渉外委員会

長尾委員長より，科学研究費助成事業に関する報告がなされた．

９．質保証委員会

瀬尾委員長より，第80回事業委員会と第２回文部科学大臣表彰式に関する報告がなされた．

10．統計教育委員会

竹内委員長より，資料に基づき，報告がなされた．

11．ＳＩ東京大会記念基金運営委員会

樋口委員長の代理で，青嶋理事長より，ISI 基金への助成申請結果について報告がなされた．

12．その他

なし

＜審議事項＞

１．JJSD 支援委員会

なし

２．和文誌編集委員会

なし

３．大会委員会

なし

４．企画・行事委員会

なし

５．庶務委員会

なし

６．広報委員会

なし

７．国際関係委員会

なし

８．渉外委員会

なし

９．質保証委員会

なし

10．計教育委員会

なし

11. ＩＳＩ東京大会記念基金運営委員会

なし

12. その他

なし

今後の予定

2026年９月13日（日）午後１：00 役員・代議員協議会
2026年10月11日（日）午後１：00 理事会
2026年11月 日本統計学会春季集会準備会議
2027年２月14日（日）午後１：00 理事会
2027年３月７日（日）午後１：00 社員総会
2027年５月９日（日）午後１：00 理事会

５．2026年役員・代議員協議会記録

日時：2026年９月13日（日）午後１時01分～午後２時56分
場所：筑波大学　自然系学系棟 D802
オンライン協議会として実施
Zoom（ミーティング ID: 850 5918 3991）

１．会長挨拶
２．理事および委員の交代について
３．代議員選挙，会長選挙について
４．連合大会中の日本統計学会関連セッションについて
５．理事会報告
６．第21回春季集会について
７．科学研究費について
８．統計検定について
９．その他（質疑応答，情報提供等）
・今後の予定

６．新刊情報

新刊情報を掲載します．

著者名：Yoshio Miyahara（宮原　孝夫）
書名：Risk Sensitive Value Measure Method: A New Method of Project Evaluation
出版社：World Scientific Publish Company
価格：USD 88.00
出版年月：2025年８月
内容紹介：リスク鋭感的価値尺度法（Risk Sensitive Value Measure Method）を提案し，その適用法を説明している．

著者名：Ashis SenGupta,
Kunio Shimizu（清水　邦夫）
書 名：Probability Distributions for Directional Data on Smooth Manifolds
出版社：Wiley
価格：$108.00（E-Book），$134.95（Print）
出版年月：2026年８月
内容紹介：角度データは円周上の分布を使ってモデリングすることができる．本書は，円周のみならず，一般化と考えられる多様体，具体的には球面，シリンダー，トーラス，およびディスク上の確率分布論を展開している．

７．学会事務局から

学会費払込のお願い

2026年度会費の請求書が会員のお手元に届いていることと思います．会費の納入率が下がると学会会計に大きく影響いたします．速やかな納入に

ご協力をお願い申し上げます．便利な会費自動払込制度もご用意しています．次の要領を参照の上，こちらもご活用下さい．また，クレジットカードでの学会費払込も受け付けております．お申込みは学会ホームページよりお願いいたします．（https://www.jss.gr.jp/fee/）．

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに，氏名と住所を以下にお伝えください．手続きに必要な書類が送付されます．

〒101-0051　東京都千代田区神田神保町3-6
能楽書林ビル5F
公益財団法人統計情報研究開発センター内
日本統計学会担当
Tel & Fax：03-3234-7738
E-mail：shom@jss.gr.jp

訃報

次の方が逝去されました．謹んで追悼の意を表し，御冥福をお祈り申し上げます．

齋藤　　敦	会員
中島　栄二	会員

入会承認

荒巻涼馬，今川要，上野孝斗，宇田智哉，黄傲，黄良祺，岡田朋子，緒方陸，奥創平，掛布顕一朗，片山響，桂木悠作，加藤直人，小林潤之介，小松冠太，坂巻顕太郎，佐藤佑飛，佐藤佑哉，篠田和彦，伊達優衣，中山裕夢，野口快，野口泰正，廣畑伸雄，古川結唯，又野裕太，宮下大輔，矢萩一樹，山本直矢，横井泰，米田亮吾，和田大宗（敬称略）

退会承認

金子愛，河内和直，川村亮太，西浦博，畑知宏，平井慎一，松下剛士，山下宙人　　（敬称略）

現在の会員数（2026年８月26日）

名誉会員	12名
正会員	1,328名
準会員	5名
学生会員	78名
総計	1,423名
賛助会員	16法人
団体会員	6団体

８．投稿のお願い

統計学の発展に資するもの，会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください．以下のような情報も歓迎いたします．

- 来日統計学者の紹介
  訪問者の略歴，滞在期間，滞在先，世話人などをお知らせください．
- 博士論文・修士論文の紹介
  (1)氏名 (2)学位の名称 (3)取得大学 (4)論文題名 (5)主査または指導教員 (6)取得年月をお知らせください．
- 求人案内（教員公募など）
- 研究集会案内
- 新刊紹介
  著者名，書名，出版社，税込価格，出版年月をお知らせください．紹介文を付ける場合は100字程度までとし，主観的な表現は避けてください．
- 会員活動紹介（叙勲・受章，各種受賞等）

できるだけ e-mail による投稿，もしくは，文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します．

原稿送付先：

〒102-0071
東京都千代田区富士見１丁目11番２号
東京理科大学経営学部経営学科内
朝日　弓未　宛
E-mail: koho@jss.gr.jp
（統計学会広報連絡用 e-mail アドレス）

- 統計学会ホームページ URL：
  https://www.jss.gr.jp/
- 統計関連学会ホームページ URL：
  http://www.jfssa.jp/
- 統計検定ホームページ URL:
  https://www.toukei-kentei.jp/
- 住所変更連絡用 e-mail アドレス：
  meibo@jss.gr.jp
- 広報連絡用 e-mail アドレス：
  koho@jss.gr.jp
- その他連絡用 e-mail アドレス：
  shom@jss.gr.jp